

国際日本研究センター

International Center for Japanese Studies

NEWS LETTER

東京外国語大学

Apr. 2025

No. 36

国際日本研究センター第36号 目次

- ◆ 対照日本語部門主催 『外国語と日本語との対照言語学的研究』 第42回研究会 日本語・中国語・視点P. 1
- ◆ 国際日本語教育部門主催 2024年度第1回研究会P. 2
- ◆ 国際日本研究センター主催 次世代研究ワークショップP. 3
- ◆ 冬学期集中講義 JS2 「文学の実験、思想史の挑戦—植民地主義を再論する」P. 3
- ◆ 国際日本語教育部門主催 2024年度第2回研究会「XR・メタバースで広がる多文化理解教育」P. 4
- ◆ 国際日本研究センター主催国際シンポジウム「韓国戒厳・内乱事態とその後——東アジアの危機を考える」P. 5
- ◆ 対照日本語部門主催 『外国語と日本語との対照言語学的研究』 第43回研究会 日本語・韓国語・名詞P. 6

【対照日本語部門主催】

第42回研究会『外国語と日本語との対照言語学的研究』

「日本語・中国語・視点」

2024年12月14日（土）14:00 開始

オンライン（ZOOM）開催



加藤晴子氏（本学）「中日・日中対訳小説に見る視点」
古賀悠太郎氏（台湾：静宜大学）「言語学における「視点」

の研究—その意義と課題—

今回は、「日本語・中国語・視点」という主題のもと2名の研究者による発表が行われた。まず加藤氏より、視点に関わる先行研究の詳細な説明があったのち、中日・日中対訳小説に見られる事例から、日本語と中国語では視点の置き方にどのような違いがあるのかについての分析が紹介され、日本語の「内なる視点」と中国語の「高みの視点」が導入された。

次に、古賀氏からは、現在までの視点に関わる研究の意義と問題点がまとめられた上で、複数の言語現象について「視点」を導入することで統一的な説明が得られる事例として、日本語と中国語の受身文の違いについて事例研究が紹介された。両者を比較した結果、日本語の受身文には「どこから見るか」という〈視座〉が関与し、中国語の受身文には「何を見るか」という〈注視点〉が関与することを示した。

オンラインによる参加者は40名を超え、議論も活発であった。

（幸松英恵）

Haruko Kato (TUFS): "Perspectives in Chinese-Japanese and Japanese-Chinese Bilingual Novels"

Yutaro Koga (Taiwan: Providence University): 'Research on 'Perspectives' in Linguistics: Its Significance and Challenges'

At this event, two researchers gave presentations on the theme of "Japanese, Chinese, and Perspectives". After a detailed explanation of previous research on perspective by Prof. Kato, she introduced an analysis of the differences between Japanese and Chinese in terms of how perspective is expressed, using examples from Japanese-Chinese bilingual novels. She introduced the concept of "inner perspective" in Japanese and "elevated perspective" in Chinese.

Prof. Koga summarized the significance and problems of research on perspective to date, and then introduced a case study of the differences between Japanese and Chinese passive sentences as an example of how introducing the concept of "perspective" can provide a unified explanation of multiple linguistic phenomena. The results of comparing the two languages showed that the Japanese passive sentence involves the "point of view" of "where to look from", while the Chinese passive sentence involves the "point of focus" of "what to look at".

We had over 40 participants online, and the discussion was lively.

(Hanae Yukimatsu)

【国際日本語教育部門主催】

2024 年度 第 2 回研究会

【共催】日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B)「辞書サイト・アプリ開発に資する質の高い日本語例文バンクの構築とその応用研究」(研究代表者：鈴木智美、課題番号：21H00535, 23K20470)

2025 年 1 月 23 日 (木) 16:00 ~ 17:30

王棟氏

「教育と ICT との可能性を考える
—教育に生かすために AI を教育する—

国際日本語教育部門では、2025 年 1 月 23 日 (木) 16:00 ~ 17:30 に、王棟氏 (早稲田大学教育・総合科学学術院助教、東京外国語大学語学研) を講師に招き、「教育と ICT との可能性を考える—教育に生かすために AI を教育する—」というテーマで研究会を行った。日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B)「辞書サイト・アプリ開発に資する質の高い日本語例文バンクの構築とその応用研究」(研究代表者：鈴木智美、課題番号：21H00535, 23K20470) との共催で開催した。コメンテーターは本学佐野洋教授が務めた。厳寒の時期の対面開催であったが、22 名の事前申し込みがあり、当日 19 名の参加者が集まった。王氏が本学大学院の出身であることなどから、常時アットホームな雰囲気ではじめられた。

王氏はまず AI の発展の歴史をたどり、氏が現在研究対象とする LLM (大規模言語モデル) の位置付けを確認した後、LLM とは「次のトークン (Token) * を確率的に予測するモデル」であること、その能力を高め、さらに望ましい応答を強化するためには「事前学習 (Pre-training)」および「事後学習 (Post-training)」が必要であることを示し、個別の専門分野に特化して LLM の精度の向上を図り、モデルの最適化を行うためには、その分野に合わせた専用の再学習 (Fine-tuning) が必要であることについて解説を行った。その後、氏が手がけた具体的な応用研究をいくつか提示するとともに、言語教育分野においては LLM を対象・道具とする応用研究がやや遅れている状況であることから、研究の必要性があらためて確認され、講演が締めくくられた。

その後、限られた時間ではあったが、参加者から率直な疑問やコメントが提示され、コメンテーターも交えて王棟氏との質疑応答が行われた。講演は基礎的知識から最先端の研究例までをカバーする内容の濃いものであり、研究会終了後も、王氏を囲み、その意見を求める参加者が続いた。機会があれば続編を設定するなどして、特に言語教育分野における具体的な応用研究に焦点を絞った研究会なども今後行っていく必要性を感じた。(鈴木智美)

* トークン (Token) : LLM 内の処理単位で、言語記号をこの処理単位に分割することをトークン化 (Tokenization) という。

(鈴木智美)

Invited Prof. Dong Wang (Assistant Professor at Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University, Visiting Researcher at Institute of Language Research, TUFU) to speak on the theme of "Considering the Possibilities between Education and ICT: Educating AI to Make the Most of Education. Organized jointly with the JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research (B) "Construction and applied research of the



database of high-quality Japanese example sentences available for the development of dictionary websites and applications” (PI: Tomomi Suzuki, Assignment Numbers: 21H00535, 23K20470). Prof. Hiroshi Sano of TUFs served as commentator. Despite the cold weather, a lively question-and-answer session was held among the participants.

(Tomomi SUZUKI)

【国際日本研究センター主催】
次世代研究ワークショップ
2025年1月31日(金) 17:00～20:00
対面・ZOOM 開催



若手研究者報告会では、以下の3人の大学院生・若手研究者から報告をいただいた。

- ・崔 高恩（東京外国語大学 国際日本研究センター 特任研究員）／李恢成『砧をうつ女』論
- ・Victor Laubenstein（東京外国語大学 博士後期課程）／Colonialism and Kirishitan-shi: A Study Case on the Encounter Between Anjirō and Xavier (1548)
- Gerard Puig（東京外国語大学 博士後期課程）／Re-articulating the World: The Legacy of the Kyoto School in Izutsu Toshihiko's Reading of Zen Dialectic

李恢成『砧をうつ女』は1972年の芥川賞受賞作である。崔氏は同作にみる〈身世打鈴〉の形式の伝統の継承という方法に注目し、ディアスポラとしての在日コリアンの歴史を記述した李恢成文学に光をあてる考察を展開された。

Laubenstein氏は、日本のキリシタン研究を総括しながら、植民地主義がもたらした構造的なダイナミズムに注目することが、日本の戦国期・近世研究に必要であることを指摘し、ザビエルやその通訳者として知られる「アンジロー（ヤジロー）」にかかわる資料発掘の状況を報告された。

Puig氏は、井筒俊彦の思想・哲学研究を体系的に論じる

研究計画について報告された。西田幾多郎ら京都学派の影響をふまえて、平易な文体で横断的な宗教・哲学について展開した井筒哲学の意義を再認識させるものであった。

(友常勉)

At the Young Researchers' Reports session, the following three graduate students and a young researcher gave presentations.

Choi Go-Eun (Research Fellow, International Center for Japanese Studies, Tokyo University of Foreign Studies) / A Study of "Kinuta wo utsu onna" by Lee Hoesung

Victor Laubenstein (Doctoral Program, TUFs) / Colonialism and Kirishitan-shi: A Study Case on the Encounter Between Anjirō and Xavier (1548)

Gerard Puig (Doctoral Program, TUFs) / Re-articulating the World: The Legacy of the Kyoto School in Izutsu Toshihiko's Reading of Zen Dialectic.

(Tsutomu TOMOTSUNE)

冬学期集中講義 JS2

「文学の実験、思想史の挑戦—植民地主義を再論する」

2月3日(月)～2月7日(金) 2/3/4限 開催

対面 + Zoom ハイブリッド開催



植民地主義に対抗する文学と思想史の試みを引き合わせてみようという意図で企画されたこの集中講義では、蜷川泰司(作家)、ブレット・ド・バリー(コーネル大学)、中野敏男(本学名誉教授)、そして豊永浩平およびインタビューーとして倉敷茂の5氏から、それぞれの現在の関心にひきつけた講義をお願いした。豪華なメンバーによる講義は、カフカ、ジュネ、フォーコー、フッサールという20世紀の文学・思想史の枠組みのもとで鳩沢佐美夫、チカッパ美恵子、永山則夫まで論じながら文学の起源と課題を、作家の創造性に言及しながら語った蜷川氏、暗闇＝darknessの反近代的・反資本主義

的射程を引き出しつつ、森崎和江の連帯の思想を、距離感を維持しながら慎重かつ優雅に論じたド・バリー氏、近代植民地主義の定義を先行する中華帝国主義との対比によって確定しつつ、沖縄の「反復帰」の思想と森崎和江を通して植民地主義を克服する可能性を提起した中野氏まで、近代と植民地主義を超えていくために、思想と文学が展開している豊かな広がりが開示されたといえよう。そして倉数氏のリードによって、沖縄出身の新鋭作家である豊永浩平氏が自作『月ぬ走いや、馬ぬ走い』の創作の背景と、あたかもサーガとしての今後の展開を予告する構成が明かされた。この豊穡な時間を可能してくれた講師の皆さんに感謝を申し上げたい。なお受講者は最大で20人であった。

(友常勉)

This intensive lecture series, which was designed to bring together Literary and Intellectual History in an attempt to counter Colonialism, saw the participation of five speakers: Writer, Yasushi Ninagawa; Prof. Bret de Bailey (Cornell University); Prof. Toshio Nakano (Professor Emeritus of TUFs); Writer, Kohei Toyonaga; and Prof. Shigeru Kurakazu, who acted as interviewer. The speakers discussed the rich expanses of thought and literature that are being developed in to order to transcend modernity and colonialism.

(Tsutomu TOMOTSUNE)

【国際日本語教育部門主催】

2024年度第2回研究会

「XR・メタバースで広がる多文化理解教育」

2025年3月4日(火) 14時00分～16時00分

講演

林 雅子氏 (東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授)
コメント

福村 真紀子氏 (茨城大学 学術研究院 応用理工学野 助教)

XR・メタバースの日本語教育への活用は、国内ではまだこれからの領域だが、海外の大学などでの関心が非常に高く、温度差が生じている。この領域で先駆的な取り組みをなされ、世界的に注目される林 雅子氏から現在および今後のXRおよびメタバースに関する国の施策および国際共修の取り組み事例とその分析に関し、参加者の視野が広がる示唆に富んだ講演をいただいた。林氏の研究により、①メタバース上でのアバター使用は、学習者の心理的な壁の低減、参加しやすさにつながっていること、②参加者同士が同一空間にいるように感じることでできる場が創出され、協働による創造的なタスク遂行による学習効果が認められること、など、仮想空間の場で豊かなコミュニケーション、タスク遂行がなされていることが示された。

次に、対面・オンライン参加者がグループで、XRやメタバースの活用や応用を具体的に各自の教育や多文化共生・理解・交流の文脈で自由に考え、共有した。最後に、多文化共生の実践・研究に長く取り組まれている福村 真紀子氏からコメンテーターとして、料理等のXR・メタバース活用のアイデア共有や茨城大学の関連研究の知見の紹介があった。知見の1つに、ある閉鎖空間に居合わせた人同士の会話が、関係のない「モノ」「おいとけさま」の存在により、和やかになることも語られた。

今回、最先端のXR・メタバース活用を、入門レベルから噛み砕いてご説明くださり、林氏に大変感謝すると同時に、その技術の急激な進展と影響力を実感し、かつ、バーチャルな場に参加する学習者あるいは参加者同士のコミュニケーションのありようにも思いを馳せる貴重な機会となったことも記しておきたい。

(鈴木美加)

The application of extended reality (XR) and metaverse in Japanese language education is a nascent field in Japan. However, it has garnered significant attention overseas, particularly at universities, resulting in a noticeable gap in interest levels. We were honored to attend a lecture by Prof. Masako Hayashi, a leading figure in this domain. Prof. Hayashi shared her insights on current and future international collaborative initiatives related to XR and metaverse, including case studies and analyses. This expanded the participants' perspectives significantly. Furthermore, we investigated the potential applications of XR and the metaverse in education and in the context of multicultural coexistence and understanding through group discussions involving both in-person and online participants. Finally, Prof. Makiko Fukumura, an expert in multicultural coexistence, presented her ideas and insights from related research on the utilization of XR and the metaverse to

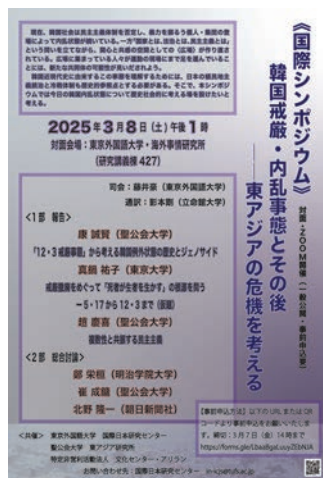


promote multicultural coexistence. This session was highly informative and enriching.

(Mika SUZUKI)

国際シンポジウム
「韓国戒厳・内乱事態とその後
——東アジアの危機を考える」
3月8日(土) 13時～18時
東京外国語大学海外事情研究所

共催：東京外国語大学国際日本研究センター
聖公会大学東アジア研究所
特定非営利活動法人 文化センター・アリラン



このシンポジウムでは、2024年12月3日にユンソンニョル大統領によって発動した戒厳とその後の内乱状況を東アジアの歴史的文脈で共有することを目的として開催された。韓国においては、「平和的な戒厳」という新造語によって戒厳内乱が正当化される一方、抑圧と暴力の時代を象徴する「白骨団」が堂々と名乗りをあげ、2025年1月19日には、ユンソンニョル「支持」勢力が裁判所へ侵入し、暴力行為が行われるなど、民主主義の蹂躪が繰り返されている。

その一方で、「国家とは、法治とは、民主主義とは」という現代韓国社会に対する問いを立てながら、関心と共感の空間としての〈広場〉が作り直されている。2016年の「ロウソクデモ」の成果と限界を踏まえながら、今日の広場の役割や連帯について考えようとする動きがさまざまな分野で行われている。広場に集まっている人々が運動の現場にまで足を運んでいることには、新たな共同体の可能性が見いだされる。

韓国近現代史に由来するこの事態を理解するためには、日本の植民地主義統治と冷戦体制も歴史的参照点とする必要がある。本シンポジウムでは今日の韓国内乱状態について、韓国の研究者からの詳細な報告として、康誠賢（聖公会大学）による事態の経過と右翼の台頭の現状についての報告「例外状態」の歴史と GENOCIDE から見る 12.3 親衛クーデターと

内乱」、さらに崔成鏞（聖公会大学）による微細な社会状況についての報告、伝統的生死観と韓国民主化闘争をふまえた真鍋祐子（東京大学）による文化状況もみすえた俯瞰的な報告、さらに日本からの考察として、鄭栄桓（明治学院大学）からの報告がなされた。

加えて、北野隆一（朝日新聞）から、日本のジャーナリズムによる報道の偏向的な傾向と、しかしまたそこに存在する国際連帯の可能性について提起された。最後にトランプ政権のもとで進行するアメリカのファシズム状況との対比をふまえたまとめの討論を友常勉がおこなった。zoom 参加もあわせて 70 名以上が 5 時間を超えるこのシンポジウムに参加した。高い関心と、韓国の状況を共有したいという熱意を感じた時間であった。

なおプログラムは以下の通り。また、司会は藤井豪（東京外国語大学）、通訳は影本剛（立命館大学）（敬称略）。

1 部 報告

康 誠賢（聖公会大学）：「12・3 戒厳事態」から考える韓国例外状態の歴史とジェノサイド」

真鍋 祐子（東京大学）：「戒厳撤廃をめぐる、「死者が生者を生かす」の根源を問う」

趙 慶喜（聖公会大学）「複数性と共振する民主主義」

2 部 コメントと討論

鄭 栄桓（明治学院大学）「12.3 内乱事態」と「東アジアの危機」をつなぐために」

崔 成鏞（聖公会大学）「12.3 親衛クーデターと内乱政局に関するいくつかの争点」

北野 隆一（朝日新聞）（日本のジャーナリズムからの報告）

友常 勉（東京外国語大学）「まとめ」

(友常勉)

International Symposium "The Korean Martial Law and the State of Civil Disturbance and Aftermath: Considering the Crisis in East Asia"

Saturday, March 8th, 13:00-18:00, Institute of Foreign Affairs, Tokyo University of Foreign Studies

Co-hosted by: International Center for Japanese Studies, Tokyo University of Foreign Studies, Institute of East Asian Studies, Anglican University of Korea, and NPO Cultural Center Arirang

At this symposium, as detailed reports from Korean researchers on the current state of internal conflict in Korea, Prof. Kang Sung-Hyun (Sungkonghoe University) will report on the course of events and the current situation of the rise of the right-wing, "The History of 'Exception States' and the 12.3 Coup d'état and Internal Conflict as Seen from GENOCIDE", as well as a report by Prof. Choi SungYong

(Sungkonghoe University) on the current state of society, and a panoramic report by Prof. Yuko Manabe (University of Tokyo) that also looked at the cultural situation in light of traditional views of life and death and the struggle for democracy in Korea, as well as a report from Japan by Prof. CHONG Young-hwan (Meiji Gakuin University).

In addition, Ryuichi Kitano (Asahi Shimbun) raised the issue of biased reporting by Japanese journalism and the possibility of international solidarity. Finally, Prof. Tsutomu Tomotsune led a summary discussion that took into account the situation of fascism in the United States under the Trump administration.

(Tsutomu TOMOTSUNE)

は韓国語に比べて比較的名詞止め文が自由に現れることがデータから実証的に示され、日韓の名詞止め文の持つ機能の違いがその原因になっているのではないかという考察が提示された。

オンラインによる参加者は40名近くに上り、議論も活発であった。

(幸松英恵)

Title of presentation:

Professor Kim Ji-Hyun (Miyazaki University): 'On the copula

structure and "noun-like" features of Japanese and Korean'

Professor Naoki Ogoshi (Emeritus Professor, University of

Tokyo): 'The usage of "noun-ending sentences" in Japanese

and Korean - about function'

In this session, two researchers gave presentations on the theme of "Japanese, Korean, and Nouns".

First, Prof. Kim explained the structural differences between Japanese and Korean noun sentences (noun-predicate sentences). Previous research has pointed out that Japanese is a language with 'noun-like' characteristics, and Korean is a language with 'verb-like' characteristics. However, she suggested that this may be due to the characteristics of Japanese and Korean noun sentences. Next, Prof. Ogoshi presented data showing that Japanese sentences with the copula dropped (noun-only sentences) occur relatively more freely than in Korean, and he suggested that the difference in the function of noun-only sentences in Japanese and Korean may be the cause of this.

There were nearly 40 participants online, and the discussion was lively.

(Hanae Yukimatsu)

【対照日本語部門主催】

第43回研究会『外国語と日本語との対照言語学的研究』

「日本語・韓国語・名詞」

2025年3月13日(土) 14:00～17:00

オンライン(ZOOM)開催

東京外国語大学国際日本研究センター 対照日本語部門主催
第43回「日本語と外国語との対照言語学的研究」
日本語・韓国語・名詞
14:00-15:00 金智賢氏 (宮崎大学 教授) 韓国語学・日韓対照研究
「日韓両語のコピュラ構造と「名詞的」特徴について」
15:10-16:40 生越直樹氏 (東京大学 名誉教授) 韓国語学・日韓対照研究
「日韓両語の「名詞止め文」の使われ方—機能との関係—」
日本語と韓国語の「名詞止め文」(文末の述語がなく名詞で終わる文)について論ずる。日韓両語は統語構造が類似しているにもかかわらず、名詞止め文の使い方に違いがある。本発表では、名詞止め文の機能に注目しながら日韓両語の異同について述べる。
16:40-17:00 討論 司会 幸松英恵 (東京外国語大学 准教授)
3月15日(土) 14:00-
Zoom開催
(一般公開・申込不要)
以下のリンク先またはQRコードより事前申し込みをお願いします。
<https://forms.gle/95pXV2w7h2gM7p47>
締め切り：3月14日(金) 14時まで
事前申し込みをされた方に、講演者の顔出し、Zoomリンクをお送りします。
対照日本語部門：
幸松英恵 松島純雄 大谷麻理 月村大 柳澤正志 土肥 三宅隆之 山崎洋平
お問い合わせ 国際日本研究センター TEL 042-330-5794 mail: info@tufs.ac.jp

発表のタイトル：

金智賢氏(宮崎大学教授)：「日韓両語のコピュラ構造と「名詞的」特徴について」

生越直樹氏(東京大学名誉教授)「日韓両語の「名詞止め文」の使われ方—機能との関係—」

今回は、「日本語・韓国語・名詞」という主題のもと2名の研究者による発表が行われた。まず金氏より、日本語と韓国語の名詞文(名詞述語文)の構造の違いが説明された。従来の研究で、日本語は「名詞的」な特徴を持つ言語であり、韓国語は「動詞的」な特徴を持つ言語であると指摘されてきたが、これは日本語と韓国語の名詞文の持つ特徴に起因するのではないかという見方が示された。次に生越氏により、名詞文からコピュラが落ちた「名詞止め文」について、日本語

今後の活動予定

◆ 2025年度 夏季セミナー・サマースクール ◆

「ことばと文化—東南アジアと東アジアの視点から」

夏季セミナー：7月23日～25日(9:00-12:00)

サマースクール：7月24日～7月25日(13:00-18:00)

ハイブリッド(対面+オンライン Zoom)

発行：東京外国語大学国際日本研究センター

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 アゴラグローバル2F

TEL 042-330-5794 Email info-icjs@tufs.ac.jp

ウェブサイト URL <http://www.tufs.ac.jp/icjs/>

